令和７年度　洞ひさご塚古墳発掘調査　現地説明会資料

令和８年３月7日（土）

各務原市埋蔵文化財調査センター

はじめに

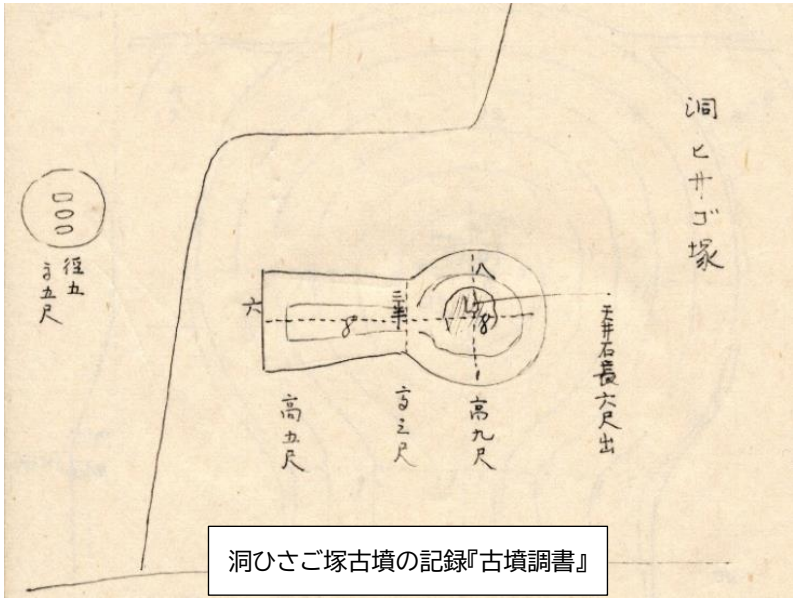
洞ひさご塚古墳は、各務東町に分布する洞東古墳群25 基に含まれる、唯一の前方後円墳です。今回、古墳の周辺が工業団地に造成されることになったため、1月下旬～3月末までの期間、記録保存のための発掘調査を行っています。

本古墳は、昭和期の土地改良工事により墳丘や石室は失われましたが、発掘調査により地中に周濠、墳丘下部、石室跡、外護列石が残存していることが分かりました。これらの痕跡から、古墳の規模や形態を復元することができます。

古墳の詳細　※カッコは『古墳調書』より

墳形 … 前方後円形
墳長 … 約30m（約 29m）
前方部最大幅 … 約 17m（約 11.5m）
後円部径 … 約 24m（約15. 4m）
後円部高 … 不明（約2. 73m）
築成段 … ２段か
石室 … 横穴式石室
外護列石残存高 … 0.5～0.8m
石材 … 在地のチャート岩
築造時期 … ７世紀後半（検討中）

調査全体空中写真（北西より）



洞ひさご塚古墳の記録『古墳調書』

『稲葉郡古墳調書三』に記された古墳

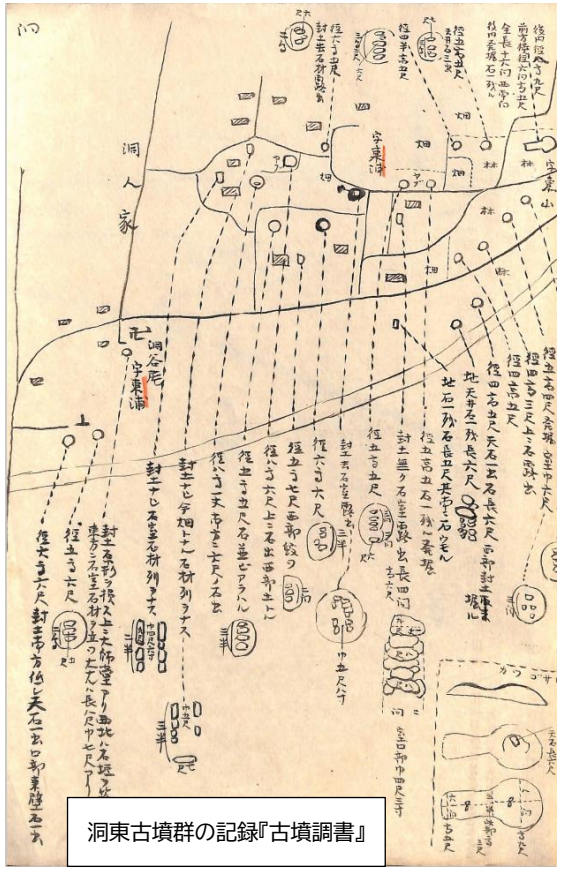
郷土研究家・小川栄一が昭和初期に作成した『古墳調書』には、当時の美濃地域に分布した古墳群が詳細に記録されています。洞ひさご塚古墳についても、墳丘のスケッチや、尺貫法による計測値が記されています。

今回の調査で判明した墳長約30mという数値は、小川の計測値に一致します。『古墳調書』には、長さ約1. 8mの石室天井石が見えていたことも記されています。

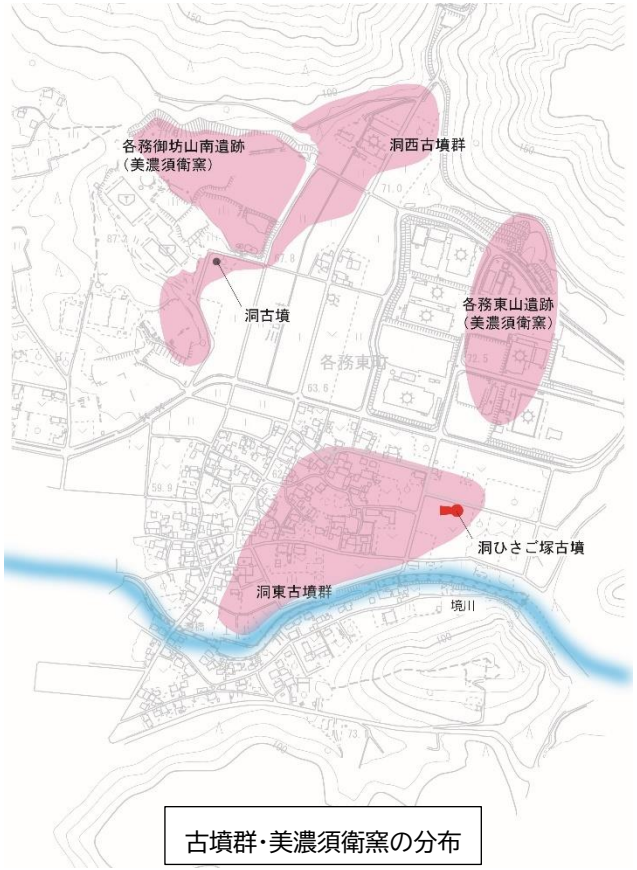
墳丘の外護列石

墳丘に沿って、外護列石と呼ばれる石積みが確認されました。これは、墳丘の保護と化粧を兼ねた設備です。後円部は石を高く積み上げていますが、前方部は石を斜めに並べたような状態です。石室のある後円部の方を重視し、立派に見せていたことが分かります。

後円部の外護列石（南東より）



洞東古墳群の記録『古墳調書』



古墳群・美濃須衛窯の分布

石室と副葬品

現在、石室の調査を進めていますが、正確な位置や規模は分かっていません。出土品は、今のところ、後円部から出土した須恵器（平瓶）1 点、鉄製品 1 点のみです。

石室は盗掘されていたと思われ、さらに土地改良の墳丘削平により原型を留めていませんので、副葬された遺物は失われていると考えられます。

出土した須恵器（平瓶）

各務地域を統治した有力集団

各務地域には、6～7世紀の群集墳が多く分布し、複数の有力集団が存在していたことが分かります。また、北部には6世紀末に操業が始まる美濃須衛窯が位置します。

この地域は、8世紀初頭の各務郡司（郡長）として知られる各務氏の拠点と考えられることから、洞ひさご塚古墳の被葬者は、各務氏に関わる有力氏族であった可能性があります。

前方後円墳は、全国的に見ると 7 世紀へ入るころに造られなくなります。各務地域で 7 世紀後半まで、この墳形にこだわり続けた理由は何だったのでしょうか。